# 間越（はざこ）地区の活性化の取り組み
## ～小さくても、心のこもったおもてなし「来だんせへ市」で地域に活力～

間越地区活性化推進協議会
嶋　原　か　お　り

### 1. 地域の概要

私たちが住んでいる間越地区は、市町村合併により平成１７年３月に米水津村（よのうづむら）から佐伯市となった。佐伯市は大分県の南東部に位置し、人口は８万３，０００人、九州一広い市である。

間越地区は、人口が１３世帯で３９人と非常に少ないが、そのうち漁業者が２６人と全体の６７％を占めており、漁業を中心とした小さな集落である。以前は、車が通れる道がないため船が重要な交通手段であり、かつては陸の孤島といわれていた。現在でも海岸沿いに道路がないため、半島の北側から峠を越えてくるしかなく、その道路も昭和５１年にようやく整備された。その反面、「日豊海岸国定公園」にも指定される美しいリアス式海岸が太平洋に面して続き、ウバメガシの林に抱かれた手つかずの自然が残る風光明媚なところである。（図１）

### 2. 漁業の概要

私たちが所属する大分県漁協米水津支店は、組合員数３７６名で、平成１６年の漁獲量は２，１１１トン、漁獲金額は７億９，６００万円である。

このうち間越地区には、漁協組合員２６名が在籍しており、４ケ統の小型定置網漁業と刺し網漁業を行っている。

### 3. 研究グループの組織と運営

間越地区活性化推進協議会は平成１５年１月１０日に発足し、地区住民全員が参加する総勢４５名の組織である。協議会は５つの部会からなり、「来だんせへ部会」は朝市の開催、「お祭り部会」は龍神社のお祭りや盆踊りの保存、「花いっぱい部会」は地区内の花の管理、「うたし部会」は敬老会、グランドゴルフ大会、女性をもてなす会などの企画、「研究部会」は龍神池の調査研究等を行っている。

### 4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

間越地区の人口は、１０年前の平成９年には６５人いたが、その後減少を続け平成１８年では３９人と６割になっている。（図２）また、この取り組みを開始した平成１５年の年齢構成では、１５歳未満の年少人口が２％と少なく、６５歳以上の老年人口が３５％と多い典型的な少子高齢化の過疎集落である。間越地区に唯一あった小学校も生徒がいないことから休校になっていたが、平成１７年３月にはついに廃校となった。

漁業の不振により生活も苦しい状況が続いているが、集落としての機能や活力が低下していることを誰もが懸念していた。「１０年後は、５～６軒しか残らないんじゃないの。」という声も聞こえてきた。そこで、平成１４年度から区長を中心に間越地区の将来につい

て何度も話し合いを行った。「このままでは、間越はなくなる。」「今からでも何かやらなければ」という危機感のもと、間越地区活性化推進協議会を立ち上げた。その中でも、中心となるのは「来だんせへ部会」が行う朝市である。協議会でも、「人が少なくなってしまった間越を活性化するためには、どうすればいいんだろう。」ということが真剣に議論され、「それには、なんといっても外部から人を呼んでにぎわいを作ることが大事だ。」ということになり、地区内で朝市を行うことになった。

**5. 研究・実践活動状況及び成果**

**(1)開催までの準備**　これまで皆朝市を行ったことがなかったため、早速参考となる取り組みや施設を視察し、帰ってからはその都度会議を開き、自分たちにどのような朝市ができるのかみんなで話し合っていった。しかし、間越地区は佐伯市の市街地から車で約４０分かかり、普段でも訪れる人はほとんどいない。立地条件としては非常に厳しく、「本当にやっていけるのだろうか。」と不安であった。何度も話し合った結果、間越の自然を生かし、新鮮な魚と郷土料理でお客様をもてなす、小さくても心のこもった朝市にしようと決めた。

朝市の名前は、「また、来てね。」という意味を込めて「来だんせへ市」と名付けた。販売物は、できるだけ地元の食材にこだわった。地区にある４ヶ統の定置網で漁獲される新鮮な魚と水産加工品や地区に伝わる郷土料理を提供することになった。私たち女性は、水産加工品や郷土料理を担当することになり、すり身の天ぷら、丸寿司、ばら寿司、自然海塩を使った干し魚等を作って出すことになった。会場は休校になっていた小学校を利用することになった。

**(2)予想以上の反響**　平成１５年５月１８日に第１回の「来だんせへ市」を開催できた。天気にも恵まれ、多くの来場者があった。１回目という事もあり、要領もわからず、なれない会計で混雑したが、魚やすり身のてんぷらなどを買い求めるお客様で地域は大いににぎわった。　（写真１－１、１－２）

これまで一番売り上げがあったのは、平成１６年１１月の１３６万円である。（図３）これは、「来だんせへ市」が話題になり、平成１６年１０月にテレビ番組で放送されたためである。その直後の朝市では、多くの人が押し掛け、商品はあっという間になくなった。通常の来客数は多くても７００人程度で平均３４４人だが、この時は１，３００人もの人が詰めかけた。（図４）峠は、ずっと車で埋め尽くされ渋滞となり、多くのお客様が、何も買えずに帰っていった。（写真２－１、２－２）この時のことを考えると、今でも胸が痛くなる。マスコミの力は、恐ろしいと思った。住所がわかるお客様には、お詫びの手紙を書いた。これ以後は、放送後の反響や話す内容も考えるようになった。

**(3)より魅力的な活動に**　これまで、多くの方に「間越に来てよかった。」と思っていただけるよう、さまざまな取り組みを行ってきた。その１つには、ゆっくりと魚料理を食べていただけるよう、定食を始めた。伊勢エビが解禁になる９月には、伊勢エビの販売と定食（写真３）をメインとした伊勢エビ祭りを開催している。活魚のセリも始めた。これは、お客様に値段を付けてもらい、一番高い値を付けた方が購入するものである。（写真４）毎回、とてもにぎやかで、お客様とのやりとりは非常に楽しい。

**(4)「来だんせへ市」の実績**　これまでの「来だんせへ市」の実施状況については、第１回目以降８月を除いて毎月第３日曜日に開催しており、１２月の開催でもう４０回になる。

売り上げについては、平成１５年は７回実施して３８４万円、平成１６年は１１回実施して７２２万円、平成１７年は１１回実施して７２５万円、平成１８年が１１月の開催までで１０回実施して５０２万円となっている。（図５）平均すると、１回の実施で６０万円の売上げがある。内訳は、活魚・鮮魚販売で平均３１万円、すり身の天ぷら、干し魚等の水産加工品と郷土料理で２６万円、なずなの塩等のその他が３万円である。（図６）

**(5)「来だんせへ市」の成果**　「来だんせへ市」を行うようになって、地域はにぎわい、外部の人との交流も盛んになった。もともと、人口が少ない地域であるため、多くの方の協力によって成り立っている。平成１１年から間越で自然海塩を作っている（株）「なずなの塩」には、開始当初から活動に参加してもらっている。「なずなの塩」は、設立者が県内の海岸を探し回っていたところ、間越の自然に魅せられ、この地で塩づくりを始めた。（写真５－１、５－２）最終的な塩の選別や袋詰めは、開始当初から私たち女性が行っていたこともあり、話をもっていったところ二つ返事で参加が決まった。また、日頃、間越の海で潜っているダイビングクラブのメンバーもいつしか手伝いに来てくれるようになった。今では、イワガキや伊勢エビを焼いて売ってくれている。その他にも、地区外にいる親戚や友達が手伝いに来てくれている。「来だんせへ市」には、多くの来場者が訪れ、常連客も多く見受けられるようになった。かつては、陸の孤島といわれ、外との交流がほとんどなかった小さな漁村に、今では人口の十倍を越える人が押し寄せてくるようになった。（写真６－１，６－２）

**６．波及効果**

この取り組みを行うようになって、住んでいる住民の意識が変わってきた。「来だんせへ市」の開催で多くの来場者が来るようになると、外の目も意識するようになり、以前より積極的に花を植えたり、海岸を掃除したりするようになった。「来だんせへ市」の会場のすぐ横には龍神池があり、昔たくさん取れていたヤマトシジミと黒松の林を復活させる活動も開始した。ヤマトシジミを放流し、土着菌を入れて発酵させた団子を池に沈め環境浄化に努めた結果、少しずつではあるがヤマトシジミが育ってきている。（写真７－１、７－２）また、佐伯市のまちづくりグループの四教堂塾（しこうどうじゅく）と協力して、今年、黒松の植樹を行った。（写真８）その他にも、来場者を迎えるため、来る途中の道路脇に自分たちで俳句や短歌などを石に彫って置いていった。（写真９）みんながこの間越をもっと楽しい地区にしようと行動するようになった。

間越地区で行われる行事には、「来だんせへ市」に協力している地区外の人やその知人が参加するようになり、グランドゴルフ大会や女性をもてなす会などは大変にぎやかに催されるようになった。この活動を行うようになって、漁業後継者も２名増えた。（写真１０）

**７．今後の課題や計画と問題点**

「来だんせへ市」では、来場者は販売物を購入するとすぐ帰っていたため、少しでも長く間越にいてもらえるよう、定食や活魚のセリ、お楽しみ抽選会などを実施してきた。今後は、イベントを盛り込む等、より長く来場者を間越に留められるよう努力していきたい。

また、３月には四教堂塾と協力して黒松の植樹も計画されており、地区外の人を取り込んだ活動も更に活発になっていく。「来だんせへ市」だけでなく、普段でも間越に来てもらえるよう、より魅力的な地域づくりを行っていきたい。

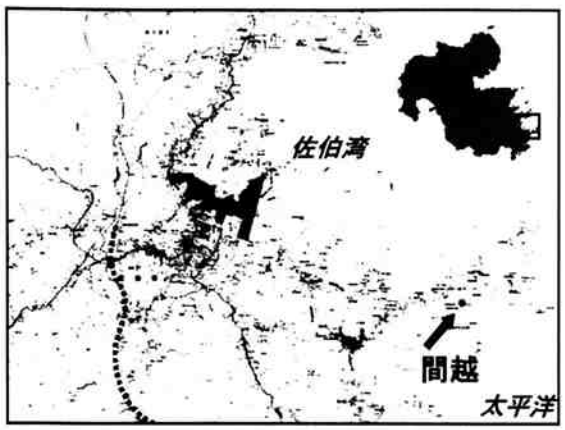


図1　間越地区の位置図

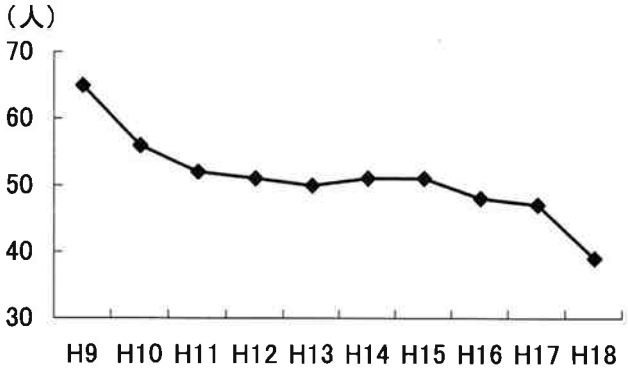


図2　間越地区の人口の推移

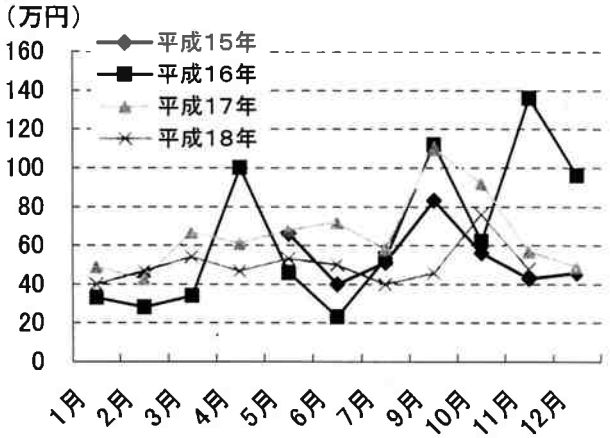


図3　月別売上金額

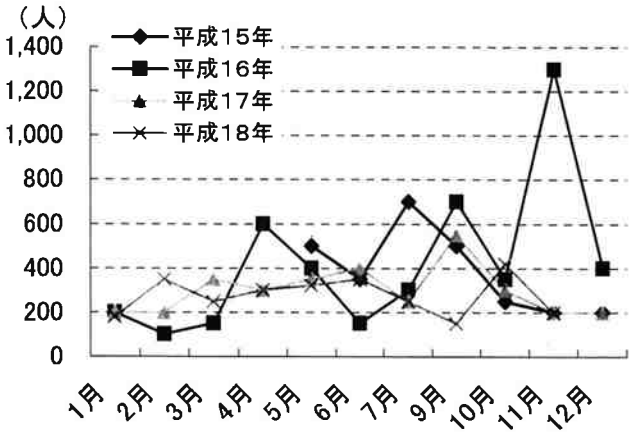


図4　月別来場者数

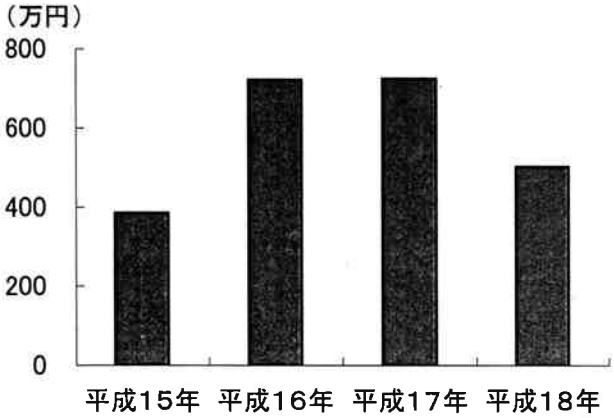


図5　年間売上金額の推移

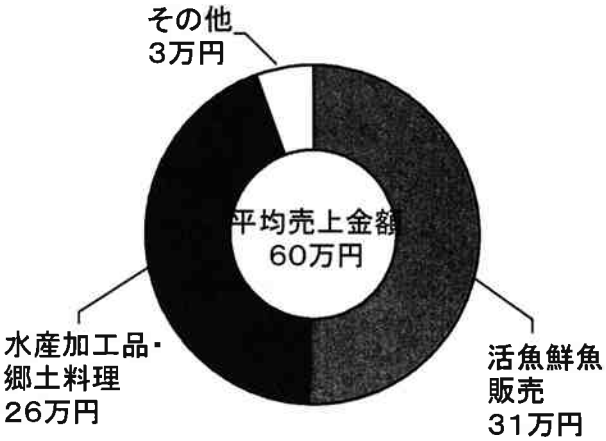


図6　平均売上金額の内訳

写真1－1　第1回来だんせへ市(H15.5.18)

写真1－2　第1回来だんせへ市(H15.5.18)

写真2－1　第17回来だんせへ市(H16.11.21)

写真2－2　第17回来だんせへ市(H16.11.21)

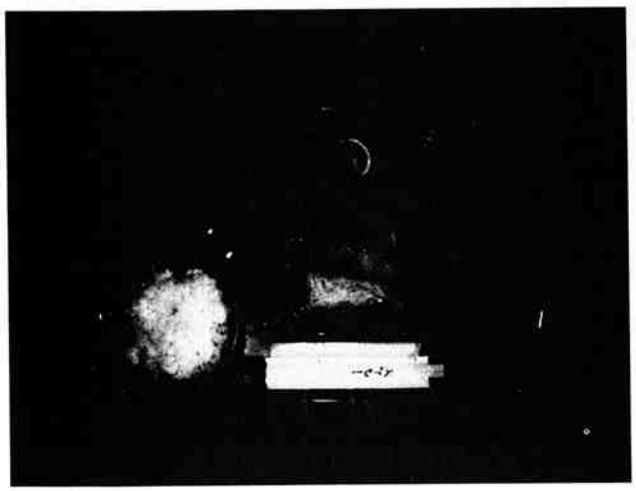

写真3　定食「伊勢海老づくし」

写真4　活魚のセリ

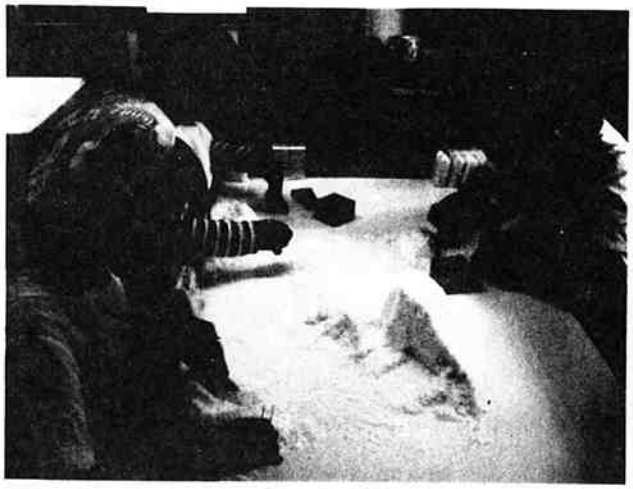

写真5－1　なずなの塩作業風景

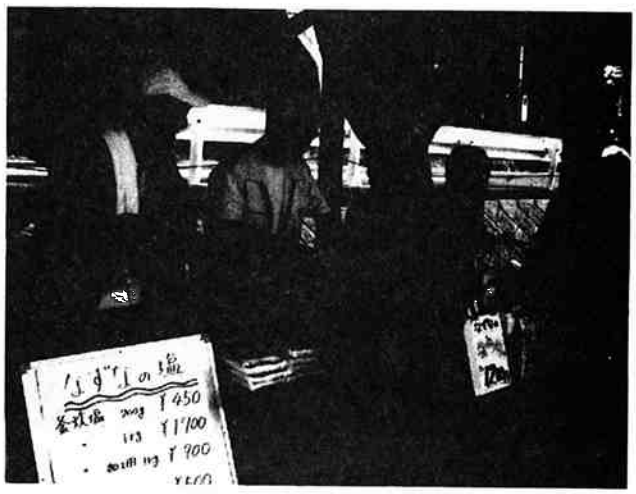


写真5－2　なずなの塩販売風景

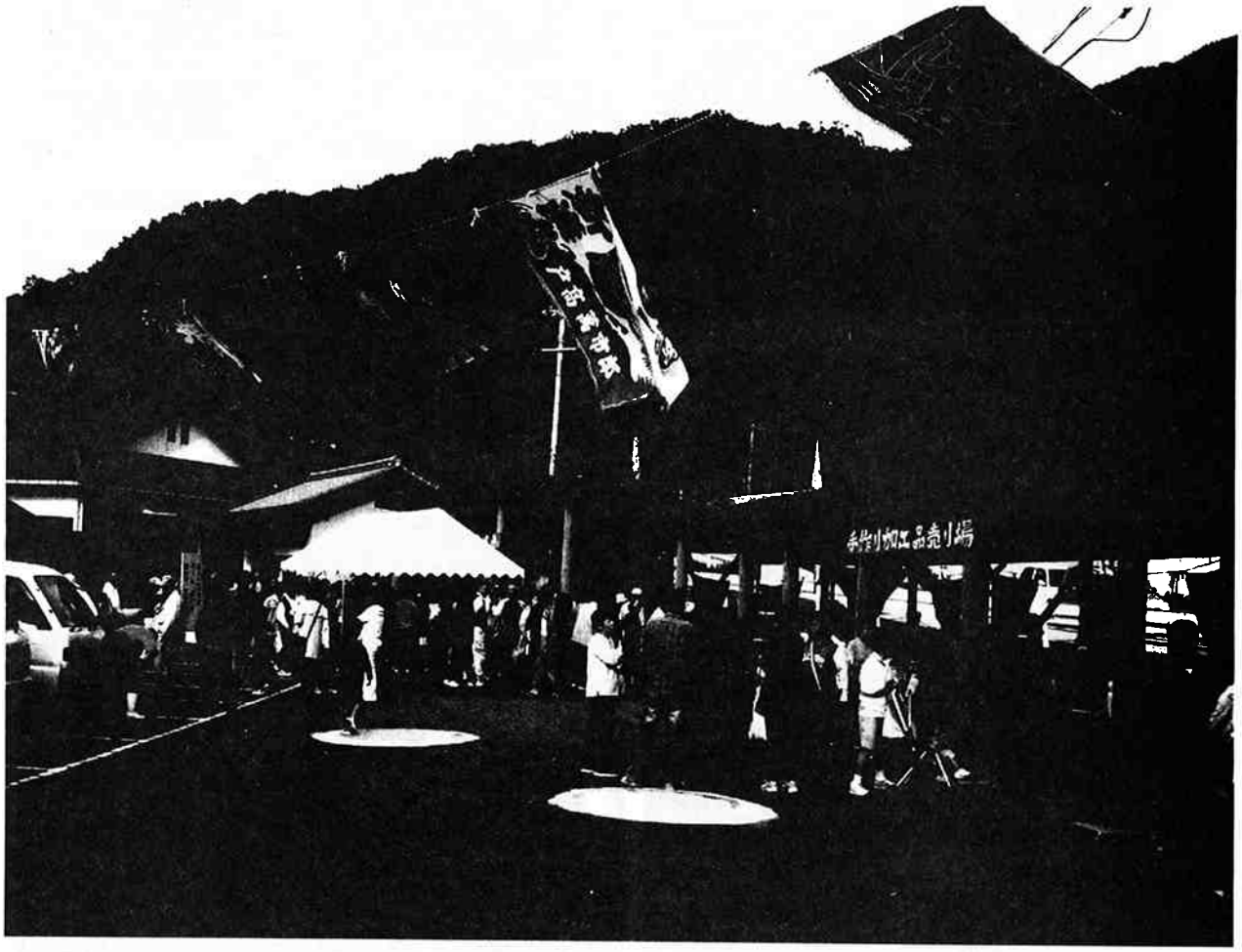

写真6－1　第38回来だんせへ市(H18.10.15)

写真6－2　第40回来だんせへ市（H18.12.17）

写真7－1　育ってきたヤマトシジミ

写真7－2　育ってきたヤマトシジミ

写真8　黒松の植樹

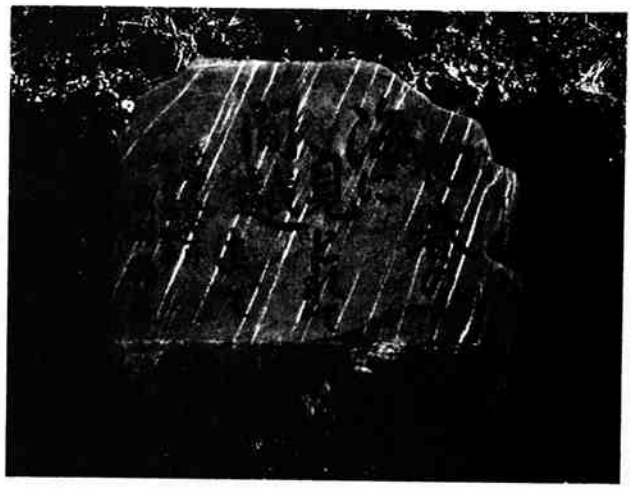

写真9　手づくりの石碑

写真10　2人の後継者